

Φ96「雙恩記」寫本の基礎的研究

特に各卷の寫本の相違に着目して*

高井龍

序

既に幾多もの先行研究が明らかにしてきたように、中國佛教は、その發展變遷の過程において、儒教の孝の倫理と関わりを深めていった経緯を持つ。そのような中國佛教と孝の関わりを考えるにあたって重要な典籍の一つとして挙げられるのが、中國編纂經典の可能性も指摘される『大方便佛報恩經』(以下『報恩經』)である¹。本稿は、この『報恩經』を講經する臺本であった敦煌文獻 Φ96「雙恩記」を取り上げ、10世紀敦煌における『報恩經』講經の寫本がいかなる特徴を有しており、またいかに利用されていたのかを考察するものである²。Φ96「雙恩記」は、卷第三、卷第七、卷第十一の三つの卷が貼り繼がれた寫本である。また、これまでに幾度も翻刻が試みられてきた講唱體文獻の一つであり、敦煌文學文獻としては、比較的良く知られた寫本でもある³。よって、多くの研究者の着目するところとなり、様々な角度から研究も進められてきた。しかし、寫本そのものに着目し

*本稿執筆にあたり、2014年8月25日の發表時、諸先生方より多數の御教示を賜った。ここに、厚く謝意を表す。

¹小野玄妙『佛教の美術と歴史』、大藏出版、1937年、12-27頁。内藤龍雄「大方便佛報恩經について」『印度學佛教學研究』第3卷第2號、1955年、313-315頁。Sumet Supalaset「『大方便佛報恩經』の成立問題」『印度學佛教學研究』第57卷第2號、2009年、979-976(164-167)頁。

²講唱體文獻が概ね10世紀の文獻であることについては既に先行研究にも指摘があり、拙論でも言及してきたため、ここでは繰り返さない。なお、特にΦ96「雙恩記」を10世紀文獻と見做す見解は、次の論文にも見られる。白化文・程毅中「對《雙恩記》講經文的一些推斷」甘肅社會科學院文學研究所編『敦煌學論集』、甘肅人民出版社、1985年、120-129頁。

³主な翻刻資料は以下の通りである。周紹良・白化文編『敦煌變文論文錄』下冊、上海古籍出版社、1982年、812-849頁。潘重規編著『敦煌變文集新書』、文津出版社、1983年、55-99頁。黃征・張涌泉校注『敦煌變文校注』、中華書局、1997年、924-959頁。項楚『敦煌變文選注(增訂本)』、2006年、中華書局、1045-1107頁(この書はΦ96「雙恩記」卷第七と卷第十一に詳注を施したものである)。

た研究は未だ十分には行なわれていない。本稿では、「雙恩記」に関する先行研究の成果をもとに、新たにΦ96「雙恩記」寫本研究に取り組んでみたい。

第一章では、Φ96「雙恩記」寫本の概略を示す。第二章では、Φ96「雙恩記」のうち、『報恩經』卷第四「惡友品」第六を扱う卷第七と卷第十一を取り上げ、Φ96「雙恩記」寫本の種類と成立の問題を考察する。続く第三章では、Φ96「雙恩記」のうち、『報恩經』卷第一「序品」第一を扱う卷第三を取り上げ、卷第七や卷第十一とは異なる寫本上の特徴を明らかにする。これらの考察を通して、「雙恩記」には、看過することのできない各巻ごとの特徴があることを明らかにできるであろう。第四章では、第二・三章で明らかにした各寫本の特徴を踏まえ、Φ96「雙恩記」の現存しない部分を想定することの問題を取り上げる。第五章では、以上の考察から窺われるΦ96「雙恩記」寫本の特徴について、少しく當時の流布との関わりを指摘したい。

第一章 Φ96「雙恩記」寫本

本章ではまず、Φ96「雙恩記」の寫本の特徴をまとめておこう。寫本の状況については、白化文・程毅中兩氏の研究⁴や『俄藏敦煌漢文寫卷叙録』⁵にも記述があるが、ここではIDP 畫像によって確認しながら幾つかの基礎情報をまとめることとする。

Φ96

Recto：雙恩記 卷第三 / 卷第七 / 卷第十一

卷第三

首題：雙恩記第三

尾題：無

存：237行

紙數：16張

卷第七

首題：雙恩記第七

尾題：佛報恩經第七

存：223行

紙數：17張

⁴注2 白化文・程毅中「對《雙恩記》講經文的一些推斷」參照。

⁵孟列夫主編、袁席箴・陳華平譯『俄藏敦煌漢文寫卷叙録』上冊、上海古籍出版社、1999年、586頁。

卷第十一

首題：報恩經第十一

尾題：佛報恩經第十一

存：224 行

紙數：14 張

白・程兩氏は當該寫本を實見調査し、『大正藏』に引かれる『報恩經』の經文との比較や、講唱體という文體に関する指摘を行なった。また、それより先にも、Φ96「雙恩記」についてはメンシコフ氏によるまとまった研究があり、散文と韻文の関係や、宋代文學との関係について考察されている。また、その寫本年代が10世紀末から11世紀初頭との指摘もなされている⁶。その後も他の研究者によってΦ96「雙恩記」の研究は進められており、引用經典や『報恩經』變相圖との関係についてなど⁷、幾つもの研究成果が出されてきた。しかし、卑見によれば、「雙恩記」の寫本そのものへの研究はそれ程進められなかったようである。この點に着目し、「雙恩記」の寫本に對して詳細な考察を加え、その寫本上の特徴を考究するならば、これまでは明らかでなかった幾多もの「雙恩記」の特徴を引き出すことができ、更にそれは、敦煌文獻に多數確認される講經文の理解にも繋がる成果となるだろう。具體的には、以下の章で考察を加えるように、現存する「雙恩記」の卷第三、卷第七、卷第十一の寫本が、それぞれ異なる字體や形式で書かれた寫本であることに着目することが必要となる。つまり、Φ96「雙恩記」に残る三つの卷が、それぞれ別個の成立過程をもつ「雙恩記」寫本であることを明らかにし、次に各寫本の特徴をおさえることで、10世紀敦煌の『報恩經』講經の特徴を浮かび上がらせるのである。以下の第二章と第三章では、まず各寫本の特徴について考察を進める。なお、論の展開上、卷第七と卷第十一を先に取り上げ、その後卷第三の書寫形式の特徴を見ていくこととする。

第二章 『報恩經』卷第四「惡友品」を敷衍する Φ96「雙恩記」卷第七と卷第十一

・卷第七の寫本の成立と現存「雙恩記」三卷の関係

Φ96「雙恩記」卷第七と卷第十一が扱っているのは、『報恩經』卷第四「惡友品」

⁶Бяньвэнь о воздаянии за милости: факсимиле рукописи, исследование, перевод с китайского, комментарии и таблицы Л.Н.Меньшикова (Памятники письменности Востока, 34), Москва: Изд-во “Наука”, 1972.

⁷龍晦「敦煌變文《雙恩記》本事考索」『世界宗教研究』1984年第3期、52-63頁。簡佩琦「敦煌報恩經變與變文《雙恩記》殘卷」『敦煌學輯刊』2005年第1期、22-36頁。

である。これは、善友太子が一切衆生の濟度のため、大海に出て摩尼寶珠を得る話である⁸。善友は、苦難を経ながらも摩尼寶珠を入手するが、國へ歸る途中、弟の惡友によって兩目を竹で突き刺されて失明し、摩尼寶珠を奪われる。一人放浪する善友は、その後、利跋師王國の王女との出會い、及び失明した視力の回復等を経て、無事歸國する。摩尼寶珠も彼の手元にもどり、一切衆生のために使われる。

この物語を題材にした卷第七と卷第十一のうち、卷第七は、善友が大臣から摩尼寶珠の話の聞かされ、その入手を決心する場面を扱っている。一方の卷第十一は、摩尼寶珠を得た善友が、惡友に騙されて兩目を失い、利跋師王國を彷徨する場面を扱っている。

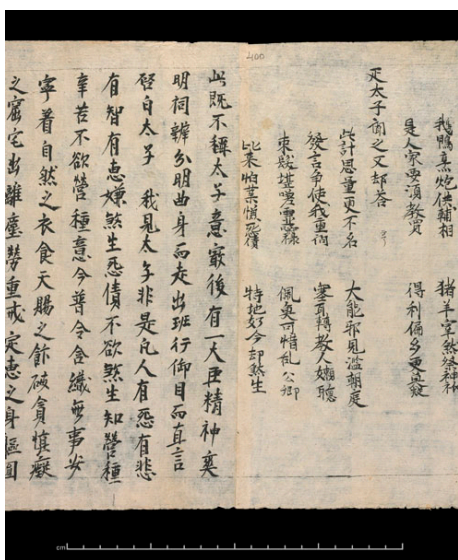


圖 1: Φ96「雙恩記」卷第七の筆が異なる箇所

さて、兩卷のうち卷第七は、講唱體文獻の寫本としては極めて一般的な書寫に成り、特異な點は窺われない。ただ、書寫した人物が二人いたようである。その點に着目することで、同じ「惡友品」を扱う卷第十一とは異なる書寫形式が採用されていたことも窺われてくる。

まず、卷第七の書寫人物について見ていこう。400行目と401行目の間で筆と紙が變わっている(左圖1)。

ここは、一切衆生を救うために、善友太子が摩尼寶珠の取得を決心する場面である。ここで重要なのは、兩紙の間で筆と紙が變わるものの、内容には斷絶がなく、文意も連絡していることである。以下、『大正藏』の『報恩經』との比較によってそれを檢證しよう。

その『報恩經』における文章は、以下の通りである。

(善友太子……(高井補))即集諸臣百官共論議言：「夫求財利何業最勝？」中有第一大臣言：「世間求利，莫先耕田者，種一萬倍。」復有一大臣言：「世間求利，莫先畜養衆生，放牧滋息其利最大。」復有一大臣言：「世間求利，莫先入海採取妙寶，若得摩尼寶珠者，便能稱意給足一切衆生。」善友太子言：「唯此爲快耳！」⁹

⁸なお、「惡友品」の後半は提婆達多の過去因緣譚を載せる。摩尼寶珠にまつわる善友太子と惡友太子の故事とは異なる内容である。

⁹『大正藏』第3卷、143頁b。

次に、Φ96「雙恩記」がこの文章をいかに敷衍講釋しているか見てみよう。分量に鑑み、韻文部分は省略する。

Φ96「雙恩記」

369 經：爾時善友太子即集諸臣百寮共論議言：

370 「夫求財於何業最勝？」

(5行省略)

376 太子纔問了，中有第一大臣白太子，曰：「吾聞財廣莫若

377 營農。今年本種五升，來歲利收於十斛，不費人之遠

378 計，只煩牛以開耕。太子（半）出自於天時，太半兼歸於地閭（潤）。

(9行省略)

388 別有一大臣曰：「不欲種田，無過養畜，或牛羊駝馬，或

389 鵝鴨雞豬，隨水草以滋生，逐放牧而肥盛。牛即以馭車

390 般（搬）載，馬即以涉路乘騎，豬羊而祭，鵝鴨以供承卿相。要

391 者必買，無日暫停。方表利多，更難過此。」偈曰：

(9行省略)

401 此既不稱太子意。最後有一大臣，精神爽

402 明（朗），詞辨分明。曲身而走出班行，仰目而直言

403 啓白：「太子！我見太子，非是凡人。有怨（慈）有悲，

404 有智有惠（慧），嫌磳生怨債，不欲磳生；知營種

405 辛苦，不欲營種。意今脓令含織（識），無事安

406 寧，著自然之衣，食天賜之飴（飯）。破貪嗔癡之窟

407 宅，出離塵勞；重戒定惠之身軀，圓

408 通法行。莫若入大海內，拜謁龍王，求摩

409 尼寶珠，與衆生利益，要飯即雨飯，要衣即

410 雨衣，要金銀即雨金銀，要珠玉即雨珠玉。不

411 傷物命，不使心機，除非菩薩以能行，難可

412 凡夫之去得。」

(16行省略)

429 經：善友太子言：「善哉！善哉！唯此快耳！」即入王宮，上白

430 父王：太子今欲大海採取好寶。

431 善友聞此臣說，忻喜異常，移時激讚於善哉，累

432 顧稱揚於快耳。再三感謝，實是智人。不覺舉身，合

433 掌偈讚：

(以下略)

先に見た『報恩經』において、善友太子は三人の大臣に一切衆生へ衣服や食事等を満たす方法を尋ねた。この場面のΦ96「雙恩記」巻第七における敷衍方法を見ても、同じく三人の大臣が登場し、それぞれが善友太子に提言している。講經文は、もとになった經典からかなり外れた内容を有する場合も少なくなく、經典にはいない人物が現れることもある。しかし、このΦ96「雙恩記」巻第七の内容を見る限り、『報恩經』の經文の内容に對して比較的忠實な敷衍を施していると言える。

更に、ここに内容上の斷絶がないという筆者の見解は、寫本の特徴からも裏付けが可能である。上掲圖1からも分かるように、筆と紙が變わった巻第七の400行目と401行目の間において、上下に引かれた天地の界線が相連続している。もし、筆や紙が變わる箇所において天地の界線にずれが確認されるならば、そこには成り立ちの異なる二つの寫本を貼り繼いだ可能性を考慮しなくてはならなくなる。しかし、この箇所にはそのような可能性を示唆する界線のずれが確認されないのである。このことから、巻第七の400行目までと401行目以降の紙とは、本文が書かれる以前に貼り付けられたものであると分かる。巻第七には筆や紙の交代が確認されるとはいえ、そこに内容の斷絶がないことが、このような寫本の界線の連続からも肯定されるであろう。

ところで、序にも述べたように、Φ96「雙恩記」は巻ごとに異なる字體で書かれている。現存三巻のうち、特に巻第三は、他の二巻とは大きく異なる方法で書寫されており、その内容にも若干異なる特徴を窺わせている（後述）。問題は、巻第七と巻第十一との関係である。

まず兩巻は、講唱體による經文の敷衍においては相似た方法を採用しており、講經文の中でも比較的 understanding の容易な部類に屬する。よって、同じ性格の講經文とすることができる面もあることが分かる。しかし、仔細に寫本を窺うと、兩巻の間にも書寫上の違いが浮かび上がる。

實は、兩巻には二つの書寫形式における差異がある。一つ目は、巻第七の「雙恩記」に確認される界線が、巻第十一の「雙恩記」には引かれていないことである。そのため後者は、字が傾くことが多く、整然さが失われている。もう一つの違いは、兩巻の首題が異なることである。巻第七が「雙恩記第七」と書かれているのに對し、巻第十一には「報恩經第十一」と書かれている。一方の尾題では、巻第七も巻第十一も「佛報恩經」と書かれている。つまり、巻第十一には「雙恩記」という名稱が寫本上に使われていないことになる。

ところで、この巻第七の書寫形式は、どちらかと言えば後に見る巻第三と近い點がある。兩巻ともに界線を有しており、「雙恩記第七」と「雙恩記第三」という

首題が確認されるのである。

よって、巻第七について、首題や尾題、及び界線という点における巻第三との近似性を意識するならば、巻第十一とは些か書寫形式に差があると言えるだろう。その成立過程や書寫方法に目を向けるならば、「雙恩記」巻第七と巻第十一の二つの寫本は異なる状況下で作成されたと考えられる。

このことから我々は、Φ96「雙恩記」が異なる成立過程を持つ三つの「雙恩記」を貼り合わせた寫本であることが指摘できる。これは、現存三巻の「雙恩記」寫本の成立背景や書寫背景を無批判に同一であると見做すことに對して、大きな問題を投げ掛けている。(この問題については第四章で取り上げる。)なお、この三つの巻は、『報恩經』講經のために意圖的に選ばれたとも考えられるが、他の巻が失われていたために手元にあった寫本を貼り繼いで出来上がったただけであったかもしれない。

ここまで、巻第七の寫本に残る題名や界線を起點として、Φ96「雙恩記」寫本三巻の形式的な相違を見てきた。次に、巻第七と巻第十一の結末部分に着目することで、その講經との関わりを見ていきたい。

・「雙恩記」巻第七と巻第十一の結末部分の特徴と講經との関わり

巻第七と巻第十一の寫本の末尾に着目すると、いずれも經文の引用によって擱筆していることに氣附く。ここで、その兩巻の末尾を翻刻し、擱筆の問題について考えていこう。

Φ96「雙恩記」巻第七

454 經 王聞此語，譬如人噎，亦不得咽，亦不得吐。語太子言：「國是
455 汝有，庫藏珍寶，隨意取用。何爲方便，自入大海。汝爲
456 吾子，生長深宮，臥則帷帳，食則恣口。言今者遠涉途
457 路，饑渴寒暑，誰得知者！又復大海之中，衆難非一。或
458 有惡鬼毒龍，湍浪猛風，迴波涌復，水泡之山，摩竭大魚，往
459 者千歲一二。汝今云何欲入大海，吾不聽汝。」
460 《佛報恩經》第七

Φ96「雙恩記」巻第十一

681 經 時王有一果園，其園茂盛，常患鳥雀。時
682 守園監語善友言：「汝當爲我防護鳥雀，
683 我當相供給願。」
684 《佛報恩經》第十一

講經文における講唱體は、まず經文を紹介し、その後に散文と韻文によって經

文の内容を敷衍する。つまり、經文 散文 韻文の流れである。それは、Φ96「雙恩記」でも散見される文體である。ここに一例を擧げておこう。

Φ96「雙恩記」

- 331 經 時庫藏臣即入白王：「所有庫藏，太子今已三分用一，王宜思之。」
332 此臣正直爲心，忠孝成節，非關惜寶，却爲勤王。憂國
333 庫之空虛，必朝綱之散亂。遂啓白王曰：「太子取寶布施貧
334 窮，自數月來，三分已一，不敢遮障，合具奏聞。請王誠之，勿令
335 分外。 臣主珍財合盡忠，隄防急疾要須供。
336 保持鑠鑰費身力，較察奸邪無少容。
337 府縣凋殘填納庫，生靈脂血進王宮。
338 數旬太子般馱施，已是三分減一空。

このような文體が、一般的な講經文に繰り返し用いられるものである。しかし、先に翻刻したように、Φ96「雙恩記」卷第七と卷第十一の最後の經文は、散文でも韻文でも敷衍されておらず、經文を紹介したまま終わっている。考えるに、その經文の内容について講經を行なうならば、そこには必ずや散文と韻文による敷衍が行なわれなければならないはずである¹⁰。このような經文のみの書寫について、識者によっては末尾の「《佛報恩經》第七」と「《佛報恩經》第十一」の經の字のみ別人が後から加筆した可能性を指摘するかもしれない。しかし、この尾題の文字は兩卷ともに本文と概ね同じであり、恐らく同一人物の筆に成っている。よって、この見解には首肯できない。

筆者の知る限り、これは未だ斯界で十分な議論が行なわれていない問題の一つである。筆者もまた、実際にいかなる目的があったかを確定することは叶わぬものの、その經文の内容、及び實際の講經の場を想定することで、一つの推測が提示できると考える。

まず、この卷第七と卷第十一の結末には、それぞれ新たな場面が展開されているという共通点がある。具體的には、卷第七は、善友太子が一切衆生をいかに救えるかを大臣に相談し、摩尼寶珠によって可能となることを知った結果、海へ出ることを父王に直訴する内容となっている。卷第七の最後の經文は、父王が噎び泣き、善友を引きとめる場面の冒頭である。ここに續くのは、父王と善友太子の議論の場面である。

一方の卷第十一は、善友が摩尼寶珠を得て後、弟の惡友と出會った場面から始ま

¹⁰例えば項楚氏は、卷第七の擱筆について「按此段經文之後，並無講唱之文，當是手未抄之故」と述べている。注3 項楚『敦煌變文選注（增訂本）』、1081頁。

る。悪友は、善友が摩尼寶珠を得たことに嫉妬するとともに、善友を偏愛する父母に忌み嫌われ、瓦礫以上にひどく扱われることを恐れる。その結果、悪友は善友の寝込みを襲い、善友の兩眼に竹を突き刺し、摩尼寶珠を奪う。盲目となった善友は利師跋王國へ辿り着き、箏を演奏することで、人々から食を供される。卷第十一の最後の經文は、善友が利師跋王の園を守る守園監から園の鳥雀を守るよう依頼を受ける場面である。そしてここに續くのが、善友と利師跋王國の王女との出會いであり、更には盲目となった善友の開眼の場面が展開されていくのである。

このように見てくると、卷第七と卷第十一の最後の經文とは、ともに次に始まる新たな場面の冒頭を記述したものと言える。それでは、このような新たな場面を書寫した目的は何であったのか。實際の講經する場を想定することで考えられるのは、次回の講經がいかなる内容であるかを聽衆に豫告することである。次の場面を少しく語ることにより、次の講經への興味を聽衆に引き起こしたのではなかったか。もしこの推測が正しければ、Φ96「雙恩記」の卷第七と卷第十一は、當時の講經の行われ方を窺わせる書寫と言える。

この見解に通じる講經文が、P.2418「父母恩重經講經文(擬)」である。これは、P.3919に確認される『父母恩重經』の講經文である¹¹。以下にその經文を擧げるが、太字で示したのは、P.2418が扱っている經文である。なお、講經文中に引用される經文には、本來の經文との文字異同が確認されることが少なくない。P.3919と字句が異なるP.2418「父母恩重經講經文(擬)」の經文を丸括弧()で示し、P.3191には本來ない經文を鉤括弧[]で挿入する。

如是我聞，一時佛在王舍城伊沙崛山中，與諸比丘衆二萬八千人俱，及諸菩薩無量無邊八部四衆圍繞世尊。時有聖者名曰阿難，問於如來父母恩德。彼諸菩薩咸共讚言，善哉阿難！爾時如來告阿難曰：諦聽諦聽，父母恩德有其十種。何等爲十？

一者懷擔守護恩，二者臨產受苦恩，三者生子忘憂恩，四者咽苦吐甘恩，五者迴乾就濕恩，六者洗濯不淨恩，七者乳哺養育恩，八者遠行憶念恩，九者爲造惡業恩，十者究竟憐愍恩。

佛告阿難：我觀衆生，雖居(沾)人品，心行愚蒙(蚘)，不思耶孃有大恩德，不生恭敬，棄德背恩，無有仁慈，不孝不義。阿孃懷子，十月之中，起坐不安，如擎重擔，飲食不下，如長病人。月滿生時，受諸苦痛(痛苦)，須臾好惡，恐畏(只恐)無常，如磔猪羊，血流遍(洒)地。受如是苦，生得(我)此身。咽苦

¹¹ 『父母恩重經』には異本が複数ある。参照：平野顯照「佛・道二教にみる父母恩重經」『文學部論集』第84號、2000年、89-96頁。なお、翻刻にあたっては、注3 黃征・張涌泉校注『敦煌變文校注』を参照した。

吐甘，抱持養育，洗濯不淨，無憚劬勞，忍熱忍寒，不辭辛苦，乾處兒臥，濕處母眠，三年之中，飲母白乳（血）。嬰孩童子，乃至盛年，獎教禮儀，婚嫁宦學，備（爲）求資業（財産），携荷艱辛，勤苦至終，不言恩德。〔兒行千里，母行千里；兒行萬里，母行萬里。〕男女有病，父母病生（亦病）；子若病除，父母方差。如斯養育，願早成人。及至長成（大），翻爲不孝。尊親共語，應對懔懔（違情），拗眼露（裂）睛，〔不知恩義。〕欺凌伯叔，打罵兄弟（弟兄），毀辱親情（尊親），無有禮儀（義），不遵師範。（以下略）

このことから、P.2418「父母恩重經講經文（擬）」は、『父母恩重經』の中でも母の恩愛を語る部分を扱っていることが分かる。それでは、次に P.2418「父母恩重經講經文（擬）」の最後の講唱體で語られる部分と、末尾に經文のみを書き出した箇所を翻刻する。

P.2418「父母恩重經講經文（擬）」

- 388 經：「如斯養育，願早成人。及至長成，翻爲
389 不孝。尊親共語，應對懔懔，拗眼露睛，不知恩義。」
390 此唱經文分二：一、不念重德，二、背恩違情，
391 兩段云々。不念重德者，經道如斯養育，願
392 早成人。及至長成，翻爲不孝。前來經文
393 說父母種種養育，千辛万苦，不憚寒
394 暄，乞求長大成人，且要紹繼宗祖。及其
395 長大，無孝順心，不報恩德，遊閑逐日，更返倒父母云々。
396 人家父母多恩育，憂念女男心不足
397 乞求長大得成人，紹繼門風榮爵録。
398 誰知漸識會東西，時把父娘生毀辱。
399 佛道婆婆這個人，命終必墮阿毘獄。

（以下 41 行略）

- 441 經云：「欺凌伯叔，打罵兄弟，毀辱親情，無
442 有禮儀，不遵（尊）師範。」
443 誘俗第六
444 天成二年八月七日一常書。

さて、388 行目から講唱體で語られる經文「如斯養育，願早成人。及至長成，翻爲不孝。尊親共語，應對懔懔，拗眼露睛，不知恩義。」のうち、「及至長成」以降は、子の不孝を主題としている。この内容は、最後に經文だけが書かれた 441 行目と 442 行目の經文に繋がる内容である。考えるに、講唱體で敷衍する際、「如斯養育，

願早成人。」までの經文を一つのまとまりとし、「及至長成，翻爲不孝。」以降を一つのまとまりとする方が、内容上適切な分け方であったはずである。しかし、既に「不知恩義。」と「欺凌伯叔」の間で經文が區切られている以上、母の恩愛を説く場面を一巻としてまとめるには、まさに現状のように區切らざるを得ない。このように考えれば、440 行目までは、母の恩愛を説く部分を一巻としてまとめられた講經文となる。最後の 441 行目から書寫された「欺凌伯叔，打罵兄弟，毀辱親情，無有禮儀，不遵師範。」以降の經文は、子の不孝を語る經文が続いており、母の恩愛とは異なる内容になっている。

このことは、P.2418「父母恩重經講經文(擬)」の書寫方法が、Φ96「雙恩記」と同じく、巻の終わりに新たな場面の展開する經文を書寫した講經文であり、一つの主題が語られることで一巻として成り立つことを窺わせている。

なお、他の講經文にも經文を書寫して終わる寫本が數點確認される。しかし、それらが果たして Φ96「雙恩記」と同じく巻の最後にあたるのかどうかは、確定する記述が残されていない。よって、単に何らかの事情によって途中で擱筆した可能性も否定できないのである。遺憾ながら、本節における議論の参考に供することの適切さは保證し得ない。

以上、Φ96「雙恩記」巻第七と巻第十一の寫本上の特徴を明らかにすることで、現存 3 巻の相違、及び最後に書き残された經文の意味について考察してきた。次に、巻第三の寫本の特徴を見ていきたい。

第三章 『報恩經』巻第一を敷衍する Φ96「雙恩記」巻第三の寫本の特徴

Φ96「雙恩記」巻第三の寫本上の特徴は、講經文としては異例の小字注や雙行注が多數施されている点にある。周知の如く、それらの注は、古來様々な文獻にも用いられてきたものである。しかし、そのような注が施された講經文となると、Φ96「雙恩記」の他にあまり例がない。荒見泰史氏の調査によれば、現在知られる講唱體文獻、及びそれに準ずる文獻は、合計 106 點ある¹²。ここに、近年公開された敦煌秘笈本を含めると、112 點となる¹³。それ程の数の文獻を残しながら、講經文のみならず、變文や縁起類を含んでも、小字注や雙行注を有する講唱體文獻は

¹² 荒見泰史『敦煌變文寫本的研究』「本論部 敦煌變文及其體裁：第三章 敦煌的講唱體文獻：第二節 講唱體文獻的分類」、中華書局、2010 年、108-183 頁。

¹³ 羽 19V「大目乾連冥間救母變文(擬)」、羽 39V「舜子變」、羽 71「大目乾連冥間救母變文(擬)」、羽 153「妙法蓮華經講經文(擬)」、羽 675「太子成道經變文(擬)」、羽 708「太子八相變(擬)」の 6 點である。

極めて少ない。この数字が意味しているのは、恐らく講唱體文獻とは、あまり小字注や雙行注が施される文獻ではなかったことである。

それでは、このΦ96「雙恩記」卷第三にはどのような内容の注が施されているのか。「雙恩記」卷第三に確認される雙行注を中心に見ていこう。

Φ96「雙恩記」

- 158 此經比丘是大阿羅漢，「梵語已立，不受
159 後有」已下。毘婆沙九十四云：何故名阿羅
160 漢？答：應受世間勝供養故，名阿羅漢。復次
161 阿羅〔漢〕者，謂煩惱名能害，用利惠刀，害煩
162 惱賊，此羅漢等，或是久成正覺，權作聲聞，
163 新伏無明，令無餘，故若阿羅漢。又羅漢名生，阿是無義，以無生故名阿羅漢。彼於諸界趣生死法中，不復更
164 正也。又漢者名一切惡不善法。纔昇果位。計數即塵沙莫及，都標
165 即二萬八千；阿羅者，即遠離生義，遠離諸惡不善法者，名阿羅漢。此同總惡者，理不善業，；不善者，理一切煩惱障善法故。
166 於佛會之中，聽說報恩經典。說為不是違善，如有頌言：遠離惡不善，安住勝義中，應受世
167 供養，故名阿羅漢。貪嗔皆〔 〕斷，盡是阿羅漢。來往得逍遙，生死

現在、講經文翻刻資料の中でも定本とされている『敦煌變文校注』では、ここに見られる三箇所の雙行注を、162行目冒頭「惱賊」以下にまとめて翻刻している¹⁴。この見解は、この文章の由來である玄奘譯『阿毘達磨大毘婆沙論』に照らしても正しいことが分かる。その卷第九十四には、次のようにある。

問何故名阿羅漢？答：應受世間勝供養故，名阿羅漢，謂世無有清淨命緣非阿羅漢所應受者。復次阿羅者，謂一切煩惱，漢名能害，用利慧刀，害煩惱賊，令無餘，故名阿羅漢。復次羅漢名生，阿是無義，以無生故名阿羅漢。彼於諸界諸趣諸生生死法中，不復生故。復次漢名一切惡不善法，言阿羅者，是遠離義，遠離諸惡不善法故，名阿羅漢。此中惡者謂不善業，不善者謂一切煩惱，障善法故，說為不善是違善義，如有頌言：遠離惡不善，安住勝義中。應受世上供，故名阿羅漢¹⁵。

「雙恩記」がこの文章の一部を前後させている問題について、『校注』は、傳寫の際に脱文が起こった可能性を指摘する。しかし、上掲『大正藏』の記述によるならば、ここに起こったのは脱文ではない。傳寫の過程で該當文章が前後したと考えれば良いであろう。なお、この雙行注の特徴として、『阿毘達磨大毘婆沙論』のような難解な典籍を引用している點を指摘しておこう。

¹⁴注3 黃征・張涌泉校注『敦煌變文校注』、927頁、946-947頁。

¹⁵『大正藏』第27卷、487頁。

次に、Φ96「雙恩記」以外に小字注や雙行注が確認される講經文を見てみよう。小字注や雙行注を有する講經文が少ない中であって、P.2133V「金剛般若波羅蜜經講經文（擬）」とP.2418「父母恩重經講經文（擬）」は、Φ96「雙恩記」との比較に適した文獻である。P.2133V「金剛般若波羅蜜經講經文（擬）」には、識語に「貞明六年正月 日，食堂後面書抄，清密，故記之爾。」とある。その清密の名前は、黒く上塗りして消されていることから、清密の死後、別人の手に渡った寫本であったと推察される。つまり、實際の講經に幾度も使われた寫本なのである。一方、P.2418「父母恩重經講經文（擬）」もまた多數の朱筆が確認されており、實際に利用された寫本であると推察される。それでは、これらの寫本に見られる注は、どのような内容となっているのだろうか。その一部を取り上げよう。

P.2133V「金剛般若波羅蜜經講經文（擬）」

- 17 變現今居百億花。過去未來及現在，三心難弁唱將羅。
- 18 經：「何以故？」如前所說也。答也。言「如來說諸心」者，先學衆心也。言「皆爲非心」者，
- 19 言「是名爲心」者，是顛倒邪見之心也。乃至未來心不可得者，徵釋也。一切衆生聞說
- 181 無所去，故名如來」者。若人言眞身亦有去來，即是人不解
- 182 如來說所說儀也。眞身應身雖有異，歸一也。言死所從來，
- 183 又無所去者，即眞常不動也。報身如來者，六度十一空，化身從如實道，即是三身如來也。

P.2418「父母恩重經講經文（擬）」

- 105 經云：阿娘懷子，十月之中，起座不安，如擎
- 106 重擔，飲食不下，如長病人。
- 107 此唱經文，是世尊重明懷妊，艱難也。前來十恩中第一懷毫守護恩。
- 162 譯來貢，孝至於神，則冥靈祐助。」又太公家教：
- 163 「孝子事親，晨省吳省；知飢知渴，知暖知
- 164 寒；憂則共戚，樂則同歡；父母有病，甘
- 165 美不餐；食無求飽，居無求安；聞樂不樂，見戲不看；不修身體，不整衣冠；待至疾癒，整亦不難。
- 166 經云：「天地世界之大者，不過父母之恩，

さて、このように見來たるならば、稀に見られる講經文の小字注や雙行注は、一定の法則や決まりによってそのような形式で書かれたものとは言い難い。特に最後の小字は、163行目「孝子事親」から續く『太公家教』の本文である。この場合は、恐らくもともとは本文と同じ大きさをもって書寫されていたのであり、傳寫の過程で『太公家教』の本文であることが忘れられ、注としての扱いを受けるようになり、雙行注によって書寫されるに至ったのであろう。

つまり、従來の儒家經典や佛教典籍に行なわれた小字注や雙行注と類似する場合もあれば、出典の文章が正しく理解されずに雙行注となってしまった場合が窺われるのである。

このことから、Φ96「雙恩記」_上 P.2133V「金剛般若波羅蜜經講經文(擬)」_上 P.2418「父母恩重經講經文(擬)」の三つの講經文において、その本文に雙行注という形式を必要とした要因はなかったものと言える。何より、講唱體文獻において小字注や雙行注が壓倒的少數である事實も、講經文がそのような形式をもって注を書寫せねばならなかったとの見解を既に否定しているだろう。その一方で、卷第三が雙行注を用いて書寫されたということは、Φ96「雙恩記」三點の寫本において、卷第三と卷第七・十一の差異を示すものとなっている。

ここで想起されるのは、講經文が大きく二種類に分けられるという先行研究の指摘である¹⁶。講經文は、その叙述内容の難易度が一樣ではない。そして、難解な内容を有する講經文と物語性を重視した娛樂的要素の強い講經文との差は比較的明瞭である。例えば、現存する六種類の「維摩詰經講經文(擬)」¹⁷は、經文に極めて忠實な講經文がある一方、經文から大きくはずれて物語性を重視し、本來經典中にはなかった故事をも作成して取り入れる講經文がある。そこで、このような内容の難易による分類をΦ96「雙恩記」の三つの卷に當て嵌めて考えると、現存する「雙恩記」の三點の寫本は、卷第三と卷第七・十一という二つに分類できることになる。それは、「雙恩記」寫本のうち、卷第三とは異なり、卷第七と卷第十一は、比較的理理解しやすく、また慈恩大師基の注疏をはじめとする難解な典籍を引用していないことから指摘できる。

更に、卷第三のみは、あまり故事に富んでおらず、聽衆の興味關心を特に惹き付ける内容ではない。卷第三が扱っている經文は、以下の引用文のうち、太字で示した箇所にあたる。

如是我聞：一時，佛住王舍城耆闍崛山中，與大比丘衆二萬八千人俱 皆所作已辦，梵行已立，不受後有，如摩訶那伽，心得自在，其名曰：摩訶迦葉、須菩提、憍陳如、離越多訶多、富樓那、彌多羅尼子、畢陵伽婆蹉、舍利弗、摩訶迦旃延、阿難、羅瓊羅等。衆所知識菩薩摩訶薩三萬八千人俱 此諸菩薩久殖德本，於無量百千萬億諸佛所，常修梵行，成滿大願，悉能通達百千禪定

¹⁶北村茂樹「敦煌出土所謂「維摩詰經講經文」の二つの系統について」『北陸史學』第24卷、1975年、31-49頁。この二つの系統分類については、次の論文に賛同する見解が見られる。小南一郎「孟蘭盆經」から「目連變文」へ 講經と語り物文藝との間(下)」『東方學報』第75冊、2003年、1-84頁。

¹⁷寫本の數は七點(S.3872、S.4571、P.2292、P.3078、Φ101、Φ252、BD5394)である。そのうちP.3078とBD5394は同一内容である。

陀羅尼滿；不捨大悲，隨諸衆生，而能饒益；紹隆三寶，使不斷絕；能建法幢，爲諸衆生作不請友；到大智岸，名稱叢聞。其名曰：觀世音菩薩、得大勢菩薩、常精進菩薩、妙德菩薩、妙音菩薩、電光菩薩、旃平菩薩、德首菩薩、須彌王菩薩、香象菩薩、大香象菩薩、持勢菩薩、越三界菩薩、常悲菩薩、寶掌菩薩、至光英菩薩、炎熾妙菩薩、寶月菩薩、大力菩薩、無量慧菩薩、跋陀和菩薩、師子吼菩薩、師子作菩薩、師子奮迅菩薩、滿願菩薩、寶積菩薩、彌勒菩薩、文殊師利法王子等，百千眷屬俱。復有無量百千欲界諸天子等，各與眷屬俱，齎諸天上微妙香華，作天伎樂，住虛空中。諸天龍、夜叉、乾闥婆阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩嚧羅伽、人、非人等，各與若干百千眷屬俱，各禮佛足，退坐一面。

ここから分かるように、『報恩經』巻第一「序品」のうち、「雙恩記」巻第三が扱っている内容は、故事に富む内容ではないのである。

このような内容の問題の他に、寫本の書寫形式にも差異がある。巻第七と巻第十一の二巻は、韻文と散文を極めて明確に書寫し分けている一方、巻第三のみは、講唱體の韻文と散文を視覺的に區別できる形式で書寫していない場合がある。この巻第三の書寫形式は、S.4511「金剛醜女因縁」やP.2999「太子成道經」等の講唱體文獻に近く、特殊な書寫形式というには及ばない。しかし、同じ「雙恩記」として一つに貼り繼がれている巻第七・十一との比較においては、形式の相違という点で着目に値する特徴といえる。ここに、各巻の韻文と散文をいかに書き分けているか、圖像によって示しておく。



圖2：Φ96「雙恩記」各巻の講唱體の書寫方法

このような巻第三と他の巻との差異は、現存する「雙恩記」寫本が一律に作成されたものではないとする先ほどの筆者の指摘を補うものであろう。

以上の点より、Φ96「雙恩記」各巻の寫本を考えるにあたっては、各々の寫本の特徴を踏まえることが必要であると言える。このことはまた、三つの巻の成立過

程や特徴が共通するという前提を設けることの危険性を意味している。次章では、特に卷第三と卷第七の間の空白部分を考える際に念頭に置いておかねばならぬ問題を考えてみよう。

第四章 Φ96「雙恩記」卷第三と卷第七の空白部分の問題

我々は、第二章と第三章の考察を通してΦ96「雙恩記」各巻の特徴を些か明らかにできたとともに、卷第三が決して他の二巻とは同列に扱えないことが分かった。このことを踏まえると、Φ96「雙恩記」をもって、現存しない「雙恩記」卷第一、二、四、五、六、八、九、十、及び卷第十二以降の内容の想定してきた従来の研究には大きな問題が生じてくる。

一部の先行研究において、Φ96「雙恩記」の卷第三と卷第七の間には、『報恩經』の卷第一から卷第四までの講經文があったと想定されている¹⁸。それは、現存するΦ96「雙恩記」寫本に残っていない空白部分の推定である。しかし、卷第三は、卷第七や卷第十一と同じ形式や内容の講經文でないことは上に見た通りであり、そのような見解の妥当性には疑問を生じざるを得ない。

この問題については、「維摩詰經講經文（擬）」が大きな示唆を與えてくれる。

「維摩詰經講經文（擬）」のうち、S.4571とΦ101は、ともに佛國品第一を扱った内容である。しかし、兩講經文は同品中の同じ經文を扱いながらも、散文や韻文で語られる内容が大きく異なっている。既に先行研究にも兩者の來源が異なるとの指摘が簡潔になされているが¹⁹、ここではこの問題を具體的に取り上げて比較し、兩寫本の内容がどの程度異なるかを見てみよう。そして、その差異を参考に、Φ96「雙恩記」卷第三、及び卷第七と卷第十一との差異を考えていく。

まず、S.4571とΦ101の同じ經文を敷衍している箇所を表で示す。

S.4571	ΦF101
<p>經云：「爾時毘耶離大城中，有長者子名曰寶積，與五百長者子，俱持七寶蓋來詣佛所。」</p> <p>問：爾五百長者皆是國王之子，即合戀慕王宮，嬌奢快樂，因甚厭棄奢花，也來聞法？</p> <p>答：緣毘耶城內，有一居士，名號維摩，他緣是東方無垢世界金粟如來，意欲助佛化人，暫住娑婆穢境。</p>	<p>經云：「爾時毘耶離城有長者子，名曰寶積，與五百長者子，俱持七寶蓋云々。」</p> <p>居士知佛入於毘耶，緣我於此國教化衆生，佛要共我助弘大教，我須今日略用神通。今日與誰緣熟？乃觀見寶積等追歡逐樂，我須教化，令滿道心。況夫花散三春，尚假甘澤而洗蕩；佛登正覺，[] 賴菩薩以扶持。乃知花托陽和，佛憑助左（佐）。</p>

¹⁸注7参照。

¹⁹注16北村茂樹「敦煌出土所謂「維摩詰經講經文」の二つの系統について」参照。

これは、『維摩經』序品において、寶積が七寶の寶蓋を釋迦に献上する場面である。

この引用箇所を比較すると、兩講經文は、同じ經典の同じ經文を扱いながらも、その敷衍方法が大きく異なっていることが読み取れる。特に、S.4571においては維摩が登場するのに對し、Φ101には維摩が登場しない。Φ101において維摩が登場するのは、更に先の箇所になる。その間には、講唱體による多くの語りと詠いが挿入されており、またその登場場面も S.4571 のような文章ではない。

他にも、「維摩詰經講經文(擬)」のうち S.3872 は、佛國品第一と方便品第二とを併せた内容を持つ講經文となっている。一つの講經文の内容が二つの品に跨ることは些か珍しいものであり、他の「維摩詰經講經文(擬)」のみならず、「妙法蓮華經講經文(擬)」にも見られない形式である。

つまり、講經文は、同じ巻や同じ品を扱っていても、様々な敷衍方法が存在していたのである。それは、當時講經を行なう場が一様ではなかったこと、換言すれば、講經を行なう法會等の場が様々であった當時の状況に照らし合わせて考えれば、當然のことでもあろう。このことから、Φ96「雙恩記」卷第三の内容が、直接卷第七や卷第十一へと連絡するものと考えすることは、正しい想定とは言い難い。

更に、Φ96「雙恩記」卷第三と卷第七の間を埋める三つの巻に、『報恩經』卷第一「序品」の後半から卷第四「惡友品」第六の途中までの講經文が含まれるということも些か考え難いのである。通常、講經文が一つの巻で扱う經文はそれ程長文ではない。「維摩詰經講經文(擬)」や「妙法蓮華經講經文(擬)」等を見ても分かるように、一つの巻の講經文が扱う經典の内容は、一つの品の一部に過ぎない。この点からも、Φ96「雙恩記」卷第三と卷第七の間に「序品」から「惡友品」までが當て嵌まるとする見解は適切とは言い難いのである。考えられるのは、「雙恩記」寫本には、他の講經文と同じように、幾種類もの敷衍方法があったことである。それは、現在では確認できない敷衍方法も多々あったと考えるべきものである。そして、Φ96「雙恩記」に残る三巻は、卷第七と卷第十一が同じ敷衍方法であるとしても、少なくとも二種類の異なる敷衍方法の「雙恩記」寫本を貼り繼いでできあがった寫本なのである。

第五章 Φ96「雙恩記」から見る10世紀敦煌の「雙恩記」

これまで本稿では、Φ96「雙恩記」寫本が多様な成り立ちの背景があること、そして、卷第三の難解さに對し、卷第七・十一が異なる性格を持っていることを明らかにしてきた。それでは、これらのΦ96「雙恩記」の特徴から、我々は「雙恩記」の何を読み解くことができるだろうか。

まず、10世紀當時の敦煌において、「雙恩記」という『報恩經』講經文の寫本がある程度流布していたこと、そして異なる敷衍講釋が行なわれていたことである。ある寫本が一點しか残存していない孤本であれば、その寫本が存在した當時における流行の度合いはなかなか判断し難い。しかし、Φ96「雙恩記」のように、孤本でありながらも異なる性格を持つ寫本の存在が確かめられたのであれば、それは當時一定の流布を見せたことを示すものとなる。このことに繋がるのが、「雙恩記」のウイグル語譯と莫高窟に描かれた『報恩經』の變相である。既に先行研究にも明らかなように、この「雙恩記」については、P.3509等のウイグル語譯の存在が確認されている²⁰。それが敦煌で譯されたと考えられることもまた²¹、當時「雙恩記」が廣く受容されていたことを示す重要な点であろう。そして、「雙恩記」の故事の流布については、『報恩經』の卷第一「序品」と卷第四「惡友品」が、ともに莫高窟の壁畫に多數描かれてきた事實からも指摘できるだろう²²。それは、特に吐蕃支配期の頃をはじめとし、曹氏歸義軍時代に至っても盛んに壁畫に描かれてきた題材であった。特に、晩唐期に描かれた第85窟は、「惡友品」を含む『報恩經』の變相の中でも代表的なものである。『報恩經』を題材にしたΦ96「雙恩記」寫本の存在、及びそこから推定される廣範な該故事の流布は、そのような莫高窟壁畫における『報恩經』の流布と一致するものと言えるだろう。

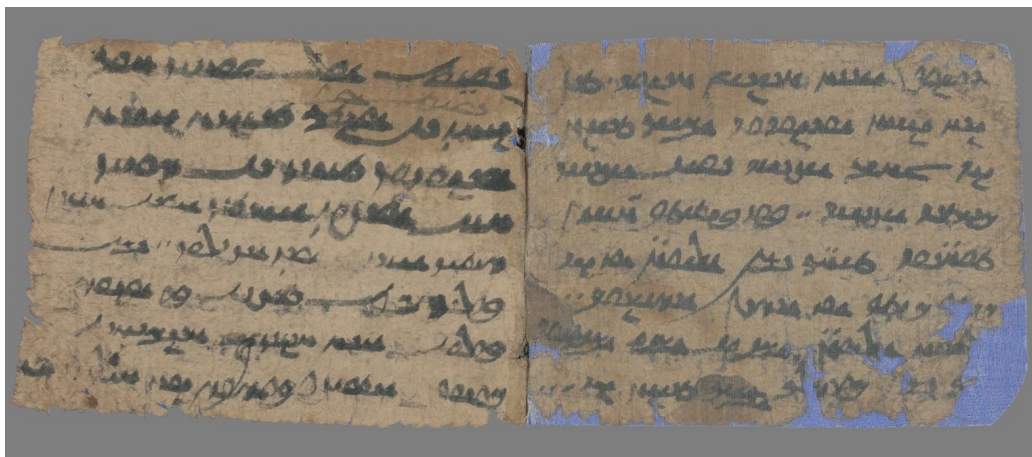


圖3：P.3509 ウイグル語譯「雙恩記」

²⁰ 牛汝極『回鶻佛教文獻——佛教綜論及巴黎所藏回鶻文佛教文獻』第十章 回鶻文《善惡兩王子故事》、新疆大學出版社、2000年、280-319頁。王書慶・楊富學「佛教與回鶻講唱文學」敦煌研究院民族宗教文化研究所編『敦煌佛教與禪宗研究論集』香港天馬出版有限公司、2006年、301-331頁。

²¹ 榮新江『歸義軍史研究——唐宋時代敦煌歷史考索』、上海古籍出版社、1996年、383頁。

²² 李永寧「報恩經和莫高窟壁畫中的報恩經變相」敦煌文物研究所編『敦煌研究文集』、甘肅人民出版社、1982年、189-219頁。殷光明『敦煌壁畫藝術與疑偽經』、民族出版社、2006年、165-185頁。



圖4：莫高窟第85窟に描かれた『報恩經』卷第四「惡友品」の善友太子と利跣師王國の王女

また、「雙恩記」という名称が卷第三と卷第七との二卷に確認されたことも重要な点である。上述の如く、兩卷には經文の敷衍方法に大きな差が確認された。それにも関わらず、兩寫本に同じ名称が使われているのである。このことから、「雙恩記」という名称は、『報恩經』を講唱體で語る講經文であれば、その敷衍方法が異なっても使用され得る名称であったと考えられるのではないだろうか。

ところで、そのように大きく性格を異にする寫本を貼り合わせたΦ96「雙恩記」とは、果たしてどのように用いられるものなのであうか。經典講釋において重要なのは、毎回の講經が經典の一から十まで全てを講釋することを念頭に行なわれるとは限らない点である。それよりも、よく知られた故事や有名な箇所のみを取り上げる講經が少なからず行なわれたと想定する方が妥當である。そのような講釋を想定してΦ96「雙恩記」を見るならば、恐らく卷第十一の善友と惡友の故事が最も聽衆を惹きつける内容と言える。一方、卷第三は上述の如くそれ程聽衆を惹きつける内容ではなく、また些か難解な内容となっている。そのような聽衆の受容も異なるであろう寫本を同時に貼り合わせているということは、Φ96「雙恩記」とは、特定の講經を目的として現存状態の如く貼り合わせられたのではなく、「雙恩記」寫本としてまとめて保管する目的等が働いた結果、現存状態の如くにまとめられたのではないだろうか。

小結

敦煌文獻Φ96「雙恩記」とは、これまで幾多もの研究者に着目されてきた文獻でありながら、その寫本上の特徴が十分には解明されていなかった講經文である。本稿では、現存する三つの卷が、それぞれ異なる字體で書かれている点に着目し、

各々の寫本の特徴を指摘することで、Φ96「雙恩記」という寫本の成り立ちを明らかにしてきた。それは同時に、實際の講經の場を髣髴とさせる書寫上の特徴や、幾種類もの「雙恩記」の存在を読み解くことに繋がるものであった。更に、ウイグル語譯や莫高窟壁畫と併せ考えることで、該故事の廣範な流布が窺うことができたことから、本研究により、新たな「雙恩記」の特徴を明らかにできたと言えるのではないだろうか。

寫本研究に重きを置いた講唱體文獻研究は、これまで變文については多數進められてきたものの、講經文については未だ十分な蓄積はない。しかし、敦煌講唱體文獻の理解を促す資料として、また當時の敦煌佛教の解明のためにも、今後もこのような講經文研究が繼續して進められる必要があるだろう。

(作者は廣島大學非常勤講師)